

白洲正子著「<sup>むげん</sup>夢幻抄一人は死ぬその日まで勉強一」世界文化社 1997年7月1日刊を読む

## 人は死ぬその日まで勉強

- (1) 西行は建久元年(一一九〇年)、七十三年の命を終えたが、明恵上人が西行に出会ったのは、西行の最晩年、二、三年のことだったと思われる。明恵十六、七歳の頃で、高雄の神護寺での修行にあきたらず、寺を出たいと思っていた時期にあたる。

(2) ……西行法師常に来りて物語して云はく……。

と、明恵の『伝記』にあるが、明恵はまた、こういうこともいつている。

(3) ……我れ先師の命に依りて、十八歳まで詩賦を稽古して風月の嘯きしに、其の興味深くして他事を忘るる程なりき。
- (1) この「十八歳」という年は、ちょうど西行が亡くなった年に当たる。ここにある「先師」が西行だとは断じ切れない。神護寺にいた叔父の上覚かも知れないし、神護寺での師・文覚を指すのかも知れない。が、西行ではない、という証拠もない。

(2) そして、この十八歳を境に、以来、明恵はふつつりと歌を捨てて、仏道ひと筋に専心するのである。

(3) あくまでも推測にすぎないが、明恵にそうさせたのには西行の力があつたからだ、と私は勝手に解釈している。最初に掲げた『伝記』からの引用は、以下、西行が明恵の前で歌の道の奥深さを説く様子が続いてゆく。もっとも、史家によれば、この部分は後から挿入されたものだという。しかし、たとえそれが誰かの手によって書き加えられたものであつたとしても、挿入せずには置かない互いの関係であつたことをよく物語っていよう。
- (1) 明恵は西行に出会って、己の進むべき道を知った。現代語でいえば、「自己発見」をした、といえるのではあるまいか。

(2) 『<sup>とがのお</sup>梅尾明恵上人遺訓』の中に見える、

……心の<sup>す</sup>数奇たる人の中に、目出度き<sup>いでく</sup>仏法者は、昔も今も出来るなり。詩頌を作り、歌・<sup>れんが</sup>連歌にたづさはることは、あながち<sup>しじゆ</sup>仏法にてはなけれども、かやうのことにも心数奇たる人が、臚て<sup>やが</sup>仏法にもすきて、智恵もあり、やさしき心使ひもけだかきなり。

という言葉も、私にはまるで西行を指していった言葉のように思える。

(3) 二人とも武家の出で、自然を愛し、自然の中に没入し切つたような境遇にいたことも、親近感を抱かせたであろう。年老いた西行には、この若い修行者が、自分の後継ぎのような気がしたのかも知れない。
- (1) ひとくちに「自己発見」といい、言葉はいたって平明で、当たり前でできることのようにだけれど、そう簡単なことではない。「自己発見」を私は、自分の資質あるいは天分を知り、天性に忠実であるべきだ、それが生きることそのものにつながる、と理解しているが、人は、自分のことが一番見えない。だから、むずかしい。

(2) 母が生前、

「人は死ぬその日まで勉強」

と、よくいっていた真意も、おそらくはそこにあるのだろう。

(3)「勉強」が、机上の学問だけを指すのでないことはむろんだが、誰のためでもない、自らを高めるため、自己を発見するために「勉強」が必要なのだと思う。しかもそれが容易ではないから、「死ぬその日まで」となったのに違いない。

その意味からすれば、自己発見もできずに、ただ道草ばかりくって来た私だが、「勉強」の対象には実に恵まれた。人にも本にも、骨董のような物にも、旅にも。

本書は、そうした私の勉強ならぬ「勉強の軌跡」と見て下さってもいい。

(4)母が逝<sup>い</sup>って、もうじき七十年。ひとり一人の一生にも相当する歳月が流れたことになる。けれど、それは昨日のことのよう。まさに夢まぼろしのうちに、時間は過ぎてゆくものらしい。

P319 ~ 322

#### <コメント>

戦後日本の復興のため活躍した白洲次郎氏の奥様で随筆家、白洲正子さんのご逝去される前年に出版された珠玉のエッセイ集。日本の伝統や文化の深い知識・理解に裏打ちされたものの見方はどのようなものかよくわかる。お母様の「人は死ぬその日まで勉強」の教えを身に着けられている賜(たまもの)と思われまます。日本人としての生き方、ものの学び方として高く評価、大いに学ばせていただきたい。

2022年1月2日 林明夫記